

第4章 実践研究の結果

1 第1回学科全体交流会（模擬株式会社 IMAKANE FACTORY総会）

平成29年6月7日（水）に「第1回学科全体交流会」兼「模擬株式会社 IMAKANE FACTORY総会」を行った。始めに高嶋校長から、「模擬株式会社として作業をしていくことで、社会の仕組みや会社の仕事がより自然に身に付くので、生徒全員が協力し合って素晴らしい会社となるようにしてほしい。」と挨拶があり、次いで、営業部長の教務主任から、株式会社の定款、組織、年間の学習計画の説明が行われた。

窯業科・産業科、農業科、生活家庭科・家庭総合科の代表生徒が、学科の年間の生産計画と販売計画を発表し、専門家（陶芸家）の指導を受けながら製品生産の工夫をすることや、八雲高等学校と「ショコラクッキー」の味とパッケージを共同開発することなどが報告され、承認された。窯業・産業科では、陶芸の専門家（窯業アドバイザー）から学校祭で販売する商品の給付けの方法を学んでいることが紹介された。農業科は農家（農業アドバイザー）から指導を受ける予定である。

2 学校祭の販売活動に向けて

(1) 商工会セミナー

学校祭の学科販売と仕入れ販売の事前学習として、10月に学年ごとに1回ずつ「商工会セミナー」を実施した。講師は、本校の学校評議員でもある（有）小川食品取締役の小川ひとみ氏である。道南産の鶴の子大豆を使った付加価値の高い豆腐や麺類などの製造を行っており、日頃の会社業務の経験を基に授業を行っていただいた。具体的には、次の目的と内容に沿って、プレゼン資料を提示しながら、具体的な内容を話していただいた。

① 目的

- ・学校祭や販売実習における仕入れ販売の方法や工夫について理解を深める。
- ・商品を開発する上で大切な事項について理解を深める。
- ・ショコラクッキーの一般販売の仕方について理解を深める。

② 内容

- ・仕入れ販売の方法や工夫
- ・販売や商品を開発する上で大切な事項
- ・ショコラクッキーを一般販売する際に大切なこと
- ・コスト計算

③ 生徒の感想

授業にアンケートを行い、生徒の率直な思いや考えを次のとおり整理した。生徒は主に「販売者としての姿勢」、「接客」、「商品」について感想を述べている。

表1 商工会セミナーの主な感想

項 目	内 容
販売者としての姿勢について	• きれいな服装や笑顔で挨拶や丁寧な言葉遣いをすることや良い印象を持っていたらいいような言葉がけが必要である。そして、販売の練習をしっかりと行って本番に臨みたいと思った。
接客について	• 自分の商品とは関係のない話で声をかけられても必ず対応することが大事である。 • 販売では、お客さんの前で暗い表情だと、「あの子、元気なの？」と思われるかもしれないのでもっと明るくしようと思いました。 • 製品を買っていただくには買ってくれる人のことを考えて丁寧に作る。 • 自分は販売の際にお客さんから声をかけられる前に自分から声をかけていきたいと思った。 • 自分の学科の商品を買わない方にも「また、よろしくお願いします。」と声をかけたいと思った。 • お客さんと接客をする中でお客さんの求めているものを考えて、商品を買ってもらえるような接客をしたい。 • 接客の際の敬語や声を大きさが大切である。
商品について	• 新しい種類の商品を作り続けたり、その商品にこだわりをもったりすることが大事であることがわかった。 • お客さんのことを思いながら製品作りをすることが大切であることがわかった。 • 良い商品を作るために時間を何年もかけて、工夫をたくさん重ねたことはすごいと思った。
その他	• お客さんが見やすいような陳列が大事であると思った。 • セミナーを聞き、学校祭に向けて忙しくなるので指示をしっかりと聞き、一生懸命がんばりたいと思った。 • 自分の作ったものを買ってもらうことでやりがい生まれと思った。 • 食品に関しては衛生管理が大切であると思った。 • 自分のためではなく、誰かのために働くことが大切であると思った。

生徒たちは、商工会セミナーによって、社会で実際に商売をしている方から販売に関する内容を聞くことで、日頃の製品づくりだけでは学ぶことができない事柄を学ぶことができた。そして、生徒たちはこの学習で学んだことを意識して、学校祭において学科で製作した製品の販売や仕入れ商品の販売を行うことができ、販売活動に向けた貴重な動機付けとなった。

(2) 学校祭に向けたチラシづくり

学校祭で各学科が販売する主な商品の中から、学年ごとに2点ずつ、保護者にPRしたい製品と仕入れ商品の品名と販売数と単価を盛り込んで、チラシを作成した。作成に当たっては、製品の紹

介は生徒が考えて、各製品を写真入りで見やすく注目を浴びやすいコメントを付けて、パソコン入力することができた。今後は、模擬株式会社代表生徒が、一層主体的に取り組めるように工夫が必要である。

(3) のぼり作り

① 目的

- ・模擬株式会社としての販売会で、販売者がより一層注目されるようにする。
- ・生徒が模擬株式会社としての販売であることを意識できるようにする。

② 内容

「模擬株式会社 IMAKANE FACTORY」の取り組みの一つとして、代表生徒を中心にしてIMAKANE FACTORY ののぼり作りを行った。のぼり作りは、複数の原案を代表生徒全員が原案の写真を見ながら、「のぼりの色と文字の色のバランスが良く、離れたところから見ても目立つのぼりを選ぶ。」という生徒たちが考えたテーマに沿って話し合った。そして、旗の色が薄い水色で文字の色がオレンジ色ののぼりが一番目立つという意見が多く出て、町内の印刷会社に発注した。今年の学校祭では、各学科の生産品販売の会場や仕入れ商品の会場にのぼりを設置し、「模擬株式会社 IMAKANE FACTORY」をアピールした。

③ 評価

- ・来校された地域の皆様や保護者の皆様からは、「立派なのぼりですね。」「とても目立ちますね。」という御感想をいただいた。
- ・のぼりの作成に関わった生徒たちは、自分たちで話し合ったり、考えたりしたのぼりが形になったと大変喜んでいて。

今後は、校内や町内で開催される販売会をはじめ、札幌で行われる北海道高等学校商業教育フェアや今金町をアピールする場面で活用したいと考えている。

3 生徒の振り返り

(1) 平成28年度学校祭と平成29年度学校祭の違い

平成28年度学校祭と平成29年度学校祭の違いについて、2・3年生の生徒にアンケート調査を行った。生徒は、主に仕入れ商品やのぼりの制作、商品管理について違いがあったことを挙げている。アンケートの結果は、次のとおりである。

表2 平成28年度学校祭と平成29年度学校祭の違い

項 目	内 容
仕入れ商品に関わって	・仕入れ商品を販売することになり、町内、道内、道外から商品を取り寄せた。また、販売する場所も増えた。
商品管理	・商品管理をするようになり、販売する商品にバーコードを貼るようになった。

項 目	内 容
商品の販売方法	・（お客さんの負担を抑えるために）移動販売が行われた。 ・学科販売では、学年ごとではなく、1～3年生で協力し、学科全体で販売することができた。また、移動販売はたくさんの人と話することができたり、お客さんの商品に対する本音を聞いたりすることができたのでとても良い経験になった。 ・お客さんの邪魔になっていた。小さいお子さんにも危険な感じがした。（角が当たりそうで）時間をずらして移動販売を行う。体育館や邪魔にならない場所で販売するなどの工夫が必要である。
商品開発	・豪雨で被害を受けた九州地方の粘土の名前を学習し、その粘土を使って製品を作った。 ・学校祭で販売する商品（チョコっとひといき）を他校の生徒と一緒に考えた。 ・IMAKANE FACTORYのロゴが入ったカップを製作し、販売した。 ・学年の枠を越えて一緒に製品を作ることはできないか？
チラシ	・商品を紹介するチラシを作った。
商品の数量	・販売する商品の数が増えた。 ・自分たちのやることが増えた。
商品の質	・昨年に比べて販売会で販売する商品の質が高くなった。来年度はもっと素晴らしいものにしたい。
その他	・先生方だけで考えるのではなく、自分たちだけで考えてあまり先生たちに頼らないようにした。 ・IMAKANE FACTORYがスタートし、仲間と話し合いをするときにたくさん悩んだが、担当する商品が全部売れてとてもうれしかった。 ・外部とのつながりをもっと持ちたい。野菜の販売、お客さんが欲しいものを作り、届けることや全学科のコラボレーション商品を作りたい。学科内の全学年で協力して商品を作りたい。

(2) 模擬株式会社になる前後の意識の違い

1月末に2年生32名、3年生20名を対象に模擬株式会社の取り組みがどのような効果をもたらしたのかについて、アンケート調査を行った。調査用紙と主な結果は次のとおりである。なお、回収率は、90.3%である。

模擬株式会社IMAKANE FACTORYアンケート

(アンケートをするねらい)

平成29年度に模擬株式会社IMAKANE FACTORYができて、学科の作業が「会社の仕事」となりました。学科交流会(模擬株式会社総会)を6月にして、販売会では、学科の製品と仕入れた製品も販売しました。作業学習が「会社の仕事」になってよかったことを教えてください。

(アンケートに答える前に読んでください。)

1 株式会社と模擬株式会社はどこがちがうの？

株式会社～役所に会社を作ったことを、決められた用紙に書いて出す。お金が30万円くらいはかかる。
模擬株式会社～用紙を出さない。

2 会社ってなに？

会社は、人と同じように、物を作ったり、買ったり売ったり、税金を納めたりすることができる。会社は、利益(もうけ)をあげるために、物を作ったり、買ったり売ったりする。模擬株式会社では、税金は納めなくてよい。

3 模擬株式会社IMAKANE FACTORYでは、利益をあげているの？

学校で取り組むため、利益をあげない。しかし、それでは、会社にならないため、PTAから商品1つ当たり、商品の値段の20%を利益として模擬株式会社に渡す。

4 今年の模擬株式会社IMAKANE FACTORYの仕事ってなに？

(1) 各学科の専門教科の作業学習

① 窯業科・産業科

窯業製品(皿、コーヒーカップなど)の製造・販売や印刷など

② 農業科

草花(ミニシクラメンなど)や野菜(タマネギ、じゃがいもなど)の栽培、収穫、加工、販売

など

③ 家庭総合科

織物(おり機で作るもの)・縫製製品作り(ステンシルふきん)、食品加工(ショコラクッキー)、紙すきや紙製品作り、販売など

④ 生活家庭科

リサイクル、縫製製品作り(ステンシルふきん)、石けん作り、紙すきや紙製品作り、販売など

がっかきょうつうさぎょう
(2) 学科共 通作 業

かんきょうせいび
① 環 境整備

- ア 町 民センター、総 合 体 育 館、野 球 場などの環 境整備
イ 校 舎内 外の清 掃
ウ 町 内の美化活 動
エ 役場、総 合 体 育 館へのフラワーレンタル（管理も）～農 業 科
オ 檜山北高 校と合 同の花壇整備～農 業 科
カ 校 舎内 外の除 雪

りゅうつう
② 流 通・サービス

- ア 役場での町 内 会配布物の仕分けサービス
イ 「としべつ」での 車 いす清 掃、レクなどの補助
ウ 地域（今 金 町）の課題を解 決する「地域グループワーク」（地域イベントの企画・運 営
・参加）
エ 学 校配布物の印 刷・発 送作 業
・体 育 祭や学 校 祭の案 内 文 書の印 刷、折り込み（紙を折ること）、封 入（封 筒
に入れること）、宛 先シール貼り、仕分け
・学 校通 信などの印 刷・発 送
オ 飲 食接 遇サービス
・野 外 給 食の材 料 発 注と調 理・サービス ・給 食 試 食 会など
カ データ入 力など
・製 品の在庫管理や販 売 品の管理（商 品 管 理システムへの入 力、入 庫（製 品や
仕 入 商 品を商 品 管 理システムに登録して保管場所に運び保管すること）、出 庫（
製 品や仕 入 商 品を商 品 管 理システムに登録して保管場所から販 売のために運び
出すこと）
・仕入れ、製 造 計 画、販 売 企 画（のぼり制 作）
・売 上 げ集 計、決 算 報 告

しょくひんかこう
③ 食 品 加 工

- ア 外部講師による加工体 験 実 習
毎 年2月に1 年、2 年各 学 年ごとに、北 海 道檜山北高 校で 行 う。
イ 北 海 道八雲高 校との合 同の商 品 開 発～家庭総合科
※商 業 教 育フェアへの参加（9 月）
ウ 北 海 道檜山北高 校との商 品 開 発～農 業 科・窯 業 科

※シフォンケーキ

ここからアンケートに^{こた}答えてください。

1 ^{さぎようがくしゅう}作業学習が^{かいしゃ}「会社」の^{しごと}仕事」になってから、^{さぎようがくしゅう}作業学習の^{じかん}時間に^{かいしゃ}「会社」の^{しごと}仕事」をして、^{まな}学
べたことは何ですか？

^{かいしゃ}「会社」の^{しごと}仕事」ではないとき（^{へいせい}平成27・28^{ねん}年度）とくらべて、^{まな}学
べてよかったこと
^かを書いてください。

--

2 みなさんの^{いしき}意識や^{かんがえ}考えは、^{もぎ}模擬^{かぶしきがいしゃ}株式会社になって、どのようにかわりましたか？

--

3 ^{さぎようがくしゅう}作業学習が^{かいしゃ}「会社」の^{しごと}仕事」になってよかったかどうか、^{した}下の1～5の^{すうじ}数字のなかで、
「これが^{じぶん}自分の^{きもち}気持ちだ。」と思う^{おも}番号に^{ばんごう}0をつけてください。

5	4	3	2	1
(とてもよかった)	(よかった)	(ふつう)	(あまりよくなかった)	(わからない)

表3 生徒の振り返り

1	作業学習が「会社の仕事」になってから、作業学習の時間に「会社の仕事」をして、学べたことは何ですか？ 「会社の仕事」ではない時（平成27・28年度）とくらべて、学べてよかったことを書いてください。
2 年	（産業科） • ない。 • よくわかりませんでした。 • 車イスやグラウンド等の経験は生かせると思いました。 • 仕入れ販売の大変さがわかりました。 • よくわからなかった。 • よくわかりませんでした。お菓子作りが出来てよかったです。・檜山北高校でのおかし作りが楽しく学べた。 （農業科A組） • そもそも作業学習が「会社の仕事」になっていたのが知らなかった。 • レベルアップができるようになる。スピードが違うとおもう。 • 特にありません。 • 1年の時とくらべて仕事の内容が同じなので違いがわかりません。 • 檜山北高等学校での食品加工でクッキーを作り、班の仲間と分量とかを話し合って協力できたことです。 • 会社の仕事になってからはかわった気がしなかったの、何も学んでいないと思います。 • 平成27・28年より1つ1つ丁寧に作業をしてお客様に楽しく買い物をしてもらえるようなことを学べたと思います。 • コミュニケーション力をつけたい。もう少し自分たちで、新しいものをつくりたい。 （農業科B組） • 販売の声かけをしたことです。 • 敬語で話をする。 • 声かけができた。 • よくわからないです。 • 前と全然変わってない。 • コミュニケーションをする大切さを学んだ。 • 花など会社の商品と思って、より丁寧に扱うことを学びました。 （生活家庭科） • クッキーを大切にしないと割ってしまうことが学びました。 • つぶらやで品をとりに行きました。今までと変わりました。 • 仕入れ商品で割れないでおくことができた。 • つぶら屋さんから仕入れ商品を購入してお客さんとコミュニケーションをとりました。 • 仕入れ商品とは売っている商品。 • 在庫管理 仕入れ商品（つぶら屋さんに商品をとりに行った）。
3 年	（産業科） • 初めの方は自分だけの仕事をたんたんとしていただけでした。すべてがそれだったわけではありませんが、それが多かったと思います。2年生になってからは、一つの組織として動いたの、私達にとったら2年生の頃から会社の仕事でした。その時は、もちろん初めのような動きではだめなので何をするにも、これからの予定を見てどの時にこれをやろうなどと決めていました。他には組織図を使ってわかりやすく動いたりなど本当に将来に近い動き方をしていました。先生方からもあまり指示を出されることなく、ほとんど自分達でなんでも進められるようにしてきました。今では、まだまだですが、周りの力がなくても動けるようになったし、自分の出来ることと出来ないことの区別ができるようになりました。 • 1年生の頃は、個人個人で作業をしたりしていました。また、報告・連絡・相談もあまりやらないで、コミュニケーションもあまり取っていませんでした。その他にも、学校祭の製品作りが間に合わなく残業もたくさんする日がありました。それに比べて、2・3年生では、残業をしないためにも作業の見通しを毎日書くようになり、1つ作る皿に何分かかるという時間が分かり、自分の仕事のペースをつかむことができました。また、報告・連絡・相談も仲間や先生にする時の仕方を知ることができました。どのような意味があり、なぜ大切なのかも授業の中で先生方が教えてくださったので、意味なども理解しながら動けるようになりました。今までは個人でやってきた作業も仲間とペアやグループを作って、会社の組織みたく動くことが増えたので、自分はどの立場にいてどんな仕事があるかすぐに分かるようになりました。また、すぐに慣れない部分もあったけど、先生方に組織図の理解の仕方を聞きに行ったりしたので、今では自分でも書けるようになりました。2・3年生の時のHRでは、社会に出た時に困らないように社会の仕組みやお金を使う優先順位などをくわしく教えてくれて勉強になりました。

また、各教科の目標を書き、できるようになるための手立てや自分の障がいと向き合う時間も作ってくれたので、逃げずに障がいを知って自分自身を知ることができて、少しずつだけど自分のことを好きになっていくことを学びました。また、数学のときには作業と組み合わせた授業をしてくれたので、作業がやりやすくなりました。

- 指示内容を理解している時と理解していない時の違い。指示を理解していない時は何もわからないので動けなかったけど、指示をしっかり理解しているとスムーズに動けて、仕事も早めに終わることができた。結果、理解していることで、仕事が早く終わること、どんな時も理解していたほうが、動きやすいことを学びました。報告・連絡・相談をどんな時でも使うこと、使わないといけないこと、3つのことをすることで、上司や周りに人が困らないし、気持ち良く仕事ができることを知りました。3つのことはどんな場所でもやらないといけないし、やった方が人との信頼、人間関係が少しでもつくことを学ぶことができました。
- 今まででは自分の目線でお皿を作っていましたが、お客さんのことを考えて丁寧に作ったり、形やデザインにこだわって作り、買ってくれたお客さんに喜んでもらえる嬉しさや、仲間とコミュニケーションをしながら確実に仕事をしたり、うまく作るために先生方にアドバイスをもらったりして、質のよいもの（技術）など学びました。
- 1年生の時は、お皿を作るにあたって個人でどんどん作って、全体の調整を先生方がしていただいたんですが、2・3年生になって、組織図を使ってみんなと関わる場面で、自分もしっかり全体のことを把握しなきゃいけないと意識するようになった。また、全体のことをしっかり把握するために、自分から仲間に聞いてわかっている状態にしたり、情報共有をしないとわからないまま仕事を進めてしまうので、待つのではなく、自分から聞くことの大切さを知った。他に、2年生の時から見通しを立てることをやり、期日がわかっている、そのために1つあたりの時間と残り時間を考えた仕事の取り組みをしたことで、仕事の進み具合がわかったり、他にやるべきことは何かわかるようになりました。
- （1年）丁寧に皿を作っていなかったこと。期限内に何枚作るという納品日がなかった。校外からの受注品がなかったこと。1・2・3年と作業の交流がなかったこと。作業だけの振り返りをしていたこと。自分一人が作る製品だけを気にしていた。確実に仕事をしていなかったこと。メモにまとめたことを家に帰ったときに、まとめ直していなかったこと。（2・3年）期限内に皿を作るようになったこと。校外からの受注品が増えたこと。2グループに分けて仕事をしていたこと。見通しを立てて、仕事をしていたこと。今日の自分の給料を増やすための行動、仕事をしていたこと。今日1日の振り返りをしていたこと。全体像を把握して行動し、他の人の仕事の手伝いをしたこと。自分の役割を果たすために、責任を持って確実に仕事をする。迷惑をかけないために、メモしたことをまとめ直していたこと。
- 先に仕事をして、掃除・準備は後回しにすること、トイレに行くタイミングを考えられたことです。

（農業科）

- 会社の仕事になってから、自分たちが作る製品などでもっと丁寧に、この期日まで終わらせなきゃいけないなどのことを学びました。会社の仕事ではない時は、製品を作って学校祭で販売をして、お客様に買ってもらうれしさなどを学べたところであり、また利益ができ、良かったと思います。
- 製品販売（会計＋説明）行事等の会議、清掃のやり方
- 毎年やっているが、一つの会社として販売して売る難しさ。どれだけ先のことを考え行動をして、どれだけ多くの仕事をするのか。
- 今まで先生に頼っていたことを自分たちもできるようになったこと。やり方も変わり、自分の考え方もどうしたらいいか前より考えるようになりました。
- 檜山北高生たちと花だん整備などをして、町の役に立てたりすることができて良かったです。
- そうりをつくれたこと。

（生活家庭科）

- 働くため。 • 分かりません。

	・与えられた時間までに片づけや掃除を終わらせることができました。同じ失敗を何度も繰り返さないこと。 ・一つ一つの仕事に知識を持てるようになった。27・28年度と比べて、織り機を使って1年生が製品を作るなど、技術面がアップして家庭科として学べるが増えたと思います。 ・会社の仕事ではない時は、良い製品を作って、売って、反省して、で終わってしまい、社会というものと触れ合う機会が実習ぐらいしかなかったが、イマカネファクトリーができてからは、会社としてやることになって、「社会ってこんな感じなんだー」ということが学べた。 ・今年は販売もあったし、ポスターもいつもと違う色だったり、デザインも違ったので今年の方が学べたと思いました。
2	みなさんの意識や考えは、模擬株式会社になって、どのようにかわりましたか？
2年	(産業科) ・かわっていません。 ・かわりませんでした。 ・何も変わらなかったです。 ・特に変わりません。 ・かわってない。 ・かわっていません。 ・特にかわってない。 (農業科A組) ・わかりません。 ・あまりかわらないです。 ・あまりかわっているところはありません。 ・今までどおり、商品なので、丁寧にやるようにしています。 ・私達が育てた野菜やドライフラワーを販売することによって、お客さんに喜んで買ってもらったり、自分の意欲を持って、売り上げ向上を目指すために熱心に働いている。 ・自分たちの意識や考えなどが会社の仕事となって、未来へ役に立つ日へと変わった気がします。 ・わかりません。 ・特にかわっていません。自分たちで作業をつくりたい (農業科B組) ・会社は大切と思いました。 ・どのように仕入れをするか、知ることができました。 ・周りとの協力ができるようになってきた。 ・わかりません。 ・先を考えて行動する。 ・合同学習や販売が多くなった。 ・作業学習の一つの作業も会社の仕事と思ってやって、会社のために貢献していると思って作業するところが変わったと思います。 (生活家庭科) ・わかりません。 ・作業は作業で分かりません。 ・特に何もありません。 ・わかりません。 ・かわってない。 ・作業で作業をやっていたので、わかりません。
3年	(産業科) ・会社になる前からですが、少しずつ自分一人でこの作業が成り立っているわけではない。周りの人がいるから今があるんだと思うようになりました。実際に社会に出たときのことを想定して動くことが何度もあり、お客様とのやり取りが発生する場面が何度もありました。他の学校には絶対できないことだと思えます。 ・1年生の頃は、めんどくさい、やりたくないなどと思っていることが多かったが、2・3年生になってからは、必要なことの確認、期限、日程、報告・連絡・相談などを自分からするようになりました。また、今では、上司や周りに迷惑をかけたくないと思うことが増えました。1年生の頃に思っていたことも今ではなくなり、自分一人でもできるようにしないと、と考えるようになりました。 ・今後、働く上で必要なことで、前はそこではなく、「うまく作れるようになりたい。」「楽しくやりたい。」でしたが、今は、自分の気持ちよりも相手のことを考えて、お皿を作ったり上司の人や周りに人が困らないような言葉や、行動をしないといけない、一番の優先順位（たとえば、卒業制作よりも販売会の方が先に終わらせるなど）などを考えられるようになったと思います。よかったに○をつけたのには、理由があります。今まで、1年間、2年生の最初は「作業だけ」みたいな感覚で、私は思っていました（仕事を）。しかし、2年生のときから、すべて授業は仕事だと先生に言われてきて、今の考えでは、今まで学んできたことは間違いではなく、自分が少しでも変わったこと、たとえば見通し（いつまでに終わらせないといいかないかなど）、優先順位（自分のことより、周りのこと優先、人がかかわっていること）、報告、連絡、

相談（仕事しやすい環境をつくるために、また、周りの人を困らせないなど）、確認もしすぎると、周りの迷惑になることや、自分の役割をはたしてから自分のためになることを考える、行動するなど、今まで2年間一日中取り組んできました。今は、作業だけではなく、全ての授業を仕事だと思っているので、よかった、に〇をつけました。

- 1年生のときと比べて、製品を作る時にお客さんのことを思って丁寧に作るようにしたり、デザインや色なども自分で考えられるようになりました。また、時間を意識して取り組んだり、見通しとっていただいた流れを立てたりし、先のことを考えながら取り組めるようになりました。その他には、失敗が怖くて何もやらなかったり、人に頼ってばかりいましたが、挑戦することによって今までできなかったことができるようになったり、与えられた仕事は最後まで責任を持って役割を果たさなくちゃいけないというようになりました。失敗したら、それを取り戻すために周りのために何かできることを探して取り組んだり、修正していく力もできるようになりました。
- 最初は、模擬株式会社ということで、すごくかたいイメージでやりづらい感じはありましたが、でも自分たちのやっていることを会社に役に立ちたいという思いに変わったり、将来働く上でも大事になってくるので、とても勉強になりました。また、自分の役割を理解しないで物事を進めてしまうと、それが失敗につながってしまうので、自分のこともそうだけど、周りのために何かしたり、迷惑をかけたくないという思いを持つことで仕事をするときに意識や考え方がだいぶ変わりました。何回も見通しを立てることをやっていくことで、今度は見通しを立てなくてもいいことがあるので、必要な時に見通しを立てることの大事さを学びました。3年生のとき、PDCAサイクルをやり、今中生との交流学习があって振り返りシートを書いた時にP、D、C、Aをもとに振り返りをしたことで、失敗したときに次どうしなければいけないか手立てが考えやすかったです。また、このような振り返りをする中で、自分はこういう時に失敗してしまうんだと、後先のことを予測できるので、振り返りはとても大事だなと思います。
- 失敗をしたら、他の人に迷惑がかかるので、迷惑をかけないようにしたこと。確実な仕事をするために、聞かれたことを理解すること（できていなかったら、もう一度聞く）。1・2・3年の交流が増えてより多くお客さんに満足のいく皿を作ろうと思ったこと。
- 自分についてはよく分かりませんが、他の方々の見通しが成り立っています。

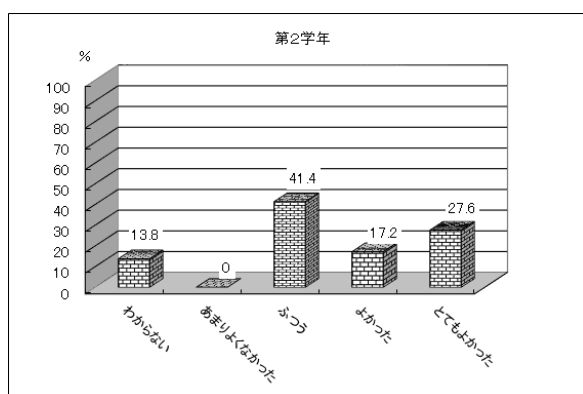
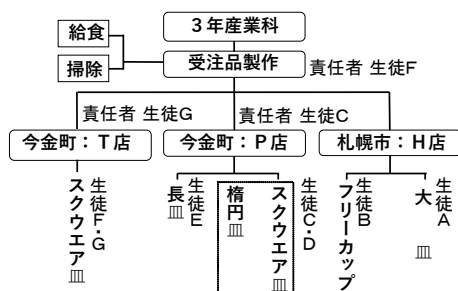
（農業科）

- 意識や考えで変わったところは学校祭に向けての製品作りなどの動きや、商品知識などの考えが変わったところだと思います。
- 今までよりも仕事や製品に対しての向き合い方が変わり、失敗をした時に周りの人への被害の大きさがわかりました。
- より仕事に対しての気持ちの入れ方が変わったと思います。どうしたら会社のためにつながる働きが出来るか考えるようになり、意識することが増えました。
- 学校祭などの売る個数や何個売れたかなどをはあくしたり、作業中の行動でいつまでにどのくらい終わらせるかなどを考えるようになりました。
- 会社になってからは、ますます作業などをしっかりとやらないと思いました。
- もっとしっかりしなきゃと思った。

（生活家庭科）

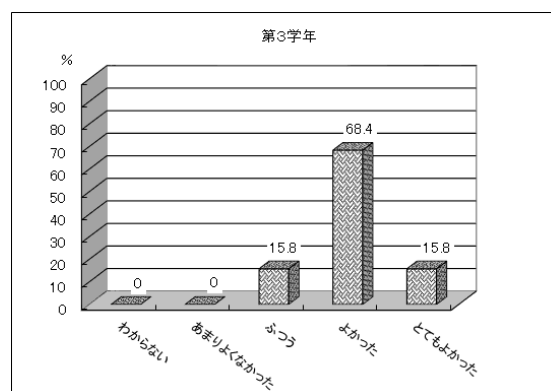
- いらいらしないで仕事をする。 ・ 分かりません。
- 1つでも多く製品を多く作るという意識が増えたと思います。
- 自分自身が仕事だと思って、各学科の製品を一生懸命作ったりなどの頑張りが見られるようになったと思います。自分が仕事をしたときと同じように、物を作って売ってということで、利益が出るなどのことが分かるようになりました。
- 私は役員をしましたが、前は作業は自分のためにあると考えていましたが、イマカネファクトリーができてからは会社のためと商品を買うお客さんを想像できるようになった。
- 製品のことも考えることがいっぱいありましたが、みんなの意見もたくさん出ていたので、良かったです。

注 組織図



(N=29)

図1 第2学年の評価



(N=19)

図2 第3学年の評価

アンケート調査では、作業学習が「会社の仕事」になってよかったかどうかについて、生徒が5段階評価を行った。その結果を学年ごとに集計すると、図1・2のとおりになる。

2年生は、「ふつう」が41.4%で最も高く、「とてもよかった」は27.6%であった。2年生の「とてもよかった」の解答数の半分以上が生活家庭科である。3年生は「よかった」が68.4%で最も高く、「とてもよかった」は15.8%であった。3年生は前提実習を経験しており、2年生との違いは現場実習経験の差が第一に挙げられる。

次いで、内容が「今養版キャリアプランニング・マトリックス」の項目に合致している上、記述量が多い学科は3年産業科である。2年生段階から、会社をイメージした作業学習に取り組んでいたため、他の学科には見られない特徴的な記述が多く見られるとともに、生徒自身が自己の成長を自覚して振り返った内容を記載している。3年農業科、生活家庭科の生徒も、記述量に差があるが、肯定的な評価が多く、模擬株式会社の取り組みがこれまでの作業学習では得られない学習経験を生徒に提供することができたことを示している。

次に、3年産業科の特徴的な記述が、知的機能による影響があったのかについて検討すると、2年産業科と3年産業科の間で知的機能が記述の内容の高さに関係する要素は見られなかった。3年産業科の指導内容・方法が他学年と異なることによって、このような成長が見られたものと考えられる。

そこで、3年産業科の指導内容・方法を生徒の記述から分析すると、次のような特徴があり、模擬株式会社の作業学習や学習全般において活用できる指導内容・方法であることが分かった。

表3「生徒の振り返り」のうち、「作業学習が『会社の仕事』になってから、作業学習の時間に『会社の仕事』をして、学べたことは何ですか？『会社の仕事』ではない時（平成27・28年度）とくらべて、学べてよかったことを書いてください。」という質問に対する回答を基に、表4に生徒が「従来の作業学習」の時と模擬株式会社の時の違いをどのように認識していたかを整理した。併せて、表4には生徒が模擬株式会社の効果であると自己評価した内容も抜粋・整理した。

なお、生徒が書いた文章は文意を損なわないように部分的に修正した。

表4 a「会社の仕事」ではない時と「会社の仕事」の時の生徒の認識の違い及び生徒の自己評価

従来の作業学習 (「会社の仕事」ではない時)	模擬株式会社 (作業学習が「会社の仕事」の時)	効果 (振り返りによる生徒の自己評価)
1年生の頃は、個人個人で作業をしたりしていた。 - 学校祭の製品作りが間に合わなく残業もたくさんする日がありました。 - 今までは自分の目線でお皿を作っていた。	<u>一学級を一つの組織として動かす。</u> そのために、<u>これからの予定を見てどのときにこれをやろうなどと決めた。</u> <u>組織図を使ってわかりやすく動いたりなど本当に卒後の職場を想定した動き方をした。</u> - 組織図を使ってみんなと関わる場面で、自分もしっかり全体のことを把握するようにした。 <u>生徒だけでなんでも進められるようにした。</u> 「教師の指示を待って行う教師主導型作業学習」 ⇨「組織図を使って作業内容の全体量と個々の生徒の担当と分量が分かり、活動の意味理解の上に立った生徒が主体的に『会社の仕事』としてペアやグループを作って組織的に取り組む作業学習」への転換	- 周りの力がなくても動けるようになり、自分のできることとできないことの区別ができるようになった。 - 残業をしないためにも作業の見通しを毎日書くようになり、1つ作る皿に何分かかるといいう時間が分かり、自分の仕事のペースをつかむことができた。 - どのような意味があり、なぜ大切なのかも授業の中で学んだことで、意味なども理解しながら動けるようになった。 - 今までは個人でやってきた作業も仲間とペアやグループを作って、会社の組織同様に動くことが増えたので、自分はどの立場にいてどんな仕事があるかすぐに分かるようになった。 - 全体のことをしっかり把握するために、自分から仲間に聞いてわかっている状態にしたり、待つのではなく、自分から聞くことの大切さを知った。
1年生のときは、お皿を作るにあたって個人でどんどん作って、全体の調整を先生方がしていた。自分一人が作る製品だけを気にいられた。 - 丁寧に皿を作っていなかった。 - 期限内に何枚作るという納品日がなかった。校外からの受注品がなかった。 1・2・3年と作業の交流がなかった。 - 作業だけの振り返りをしていた。 - 確実な仕事をしていなかった。	- 指示をしっかりと理解しているとスムーズに動けて、仕事も早めに終わることができた。 <u>見通しを立てることをやり、期日がわかっている、そのために1つあたりの時間と残り時間を考えた仕事の取り組みをした。</u> <u>期限内に皿を作るようになった。</u> <u>校外からの受注品が増えた。</u> - 見通しを立てて、仕事をしていた。 <u>今日の自分の給料はいくらになるか自己評価して計算して、給料を増やすための行動、仕事をした。</u> 2グループに分けて仕事をしていた。 <u>今日1日の振り返りをした。</u> <u>全体像を把握して行動し、他の人の仕事の手伝いをした。自分の役割を果たすために、責任を持って確実に仕事をした。</u>	- 理解していることで、仕事が早く終わること、どんなときも理解していた方が、動きやすいことを学んだ。 - 仕事の進み具合がわかったり、他にやるべきことは何かわかるようになった。 - 先に仕事をして、掃除・準備は後回しにすること、トイレに行くタイミングを考えられた。 ＜従来の製品製造＞ 販売会で不特定多数を対象に製品を販売するために製造する。 ⇨顧客の求める製品が分からない。 ＜会社の仕事としての製品製造＞ 受注品を製造する。 ⇨顧客の求める規格に応じた製品を製造する。「ものづくり」学科としては、オーダーに応じた製品製造が学科の製品製造の基本である。併せて、市場調査を行って販売会で不特定多数の消費者に購入意欲を喚起できる製品を開発・工夫することが基本である。

※注目すべき箇所には下線を付加して強調した。

表4 b「会社の仕事」ではないときと「会社の仕事」のときの生徒の認識の違い及び生徒の自己評価

従来の作業学習 (「会社の仕事」ではないとき)	模擬株式会社 (作業学習が「会社の仕事」のとき)	効果 (振り返りによる生徒の自己評価)
・メモにまとめたことを寄宿舍に帰ったときに、まとめ直していなかった。 ・会社の仕事ではない時は、製品を作って学校祭で販売をして、お客様に買ってもらううれしさなどを学べた。	・<u>迷惑をかけないために、メモしたことをまとめ直した。</u> ・<u>会社の仕事になってから、自分たちが作る製品などでもっと丁寧に、期日まで終わるようにした。</u> ・与えられた時間までに片づけや掃除を終わらせることができた。 ・<u>織り機を使って1年生が製品を作るなど、技術面がアップして家庭科として学べることが増えた。</u> ・<u>お客さんのことを考えて、丁寧に作ったり形やデザインにこだわって作った。</u>	・今まで先生に頼っていたことを自分たちもできるようになった。やり方も変わり、自分の考え方もどうしたらいいか前より考えるようになった。 ・一つの会社として販売して売る難しさやどれだけ先のことを考え行動をして、どれだけ多くの仕事をするのかを学んだ。 ・同じ失敗を何度も繰り返さないことを学んだ。 ・一つ一つの仕事に知識を持てるようになった。 ・買ってくれたお客さんに喜んでもらえる嬉しさや仲間とコミュニケーションをしながら確実に仕事をしたり、うまく作るために先生方にアドバイスをもらったりして、質のよいもの(技術)など学ぶことができた。
・会社の仕事ではない時は、良い製品を作って、売って、反省して、で終わってしまい、社会というものと触れ合う機会が実習ぐらいしかなかった。	・<u>イマカネファクトリーができてからは、会社としてやることになった。</u>	・会社としてやることになって、「社会ってこんな感じなんだー」ということが学べた。今年は販売もあったしポスターもいつもと違う色だったりデザインも違ったので、今年の方が学べたと思った。
・報告・連絡・相談もあまりやらないで、コミュニケーションもあまり取っていなかった。 他教科の授業でも作業学習の内容と関連付けて、「会社の仕事」を学ぶ場と押さえ、指導内容を構成すると、卒後の職場で活用できる知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習(仕事)に取り組む態度を育成できる。	・<u>報告・連絡・相談をどんなときでも使った。</u> ・<u>各教科の目標を書き、できるようになるための手立てや自分の障がいと向き合う時間も設定した。</u> ・<u>数学のときには作業と組み合わせた学習をした。</u> ・2・3年生のときのHRでは、社会に出たときに困らないように社会のしくみやお金を使う優先順位などをくわしく学習した。	・報告・連絡・相談も仲間や先生にする時の仕方を知ることができた。 ・報告・連絡・相談をどんな時でも使うこと、そうすると上司や周りに人が困らない、気持ち良く仕事ができること、人との信頼、人間関係が少しでもつくことを学んだ。 ・逃げずに障がいを知って自分自身を知ることができて、少しずつ自分のことを好きになっていくことを学んだ。 ・作業がやりやすくなった。

4 「会社の仕事」としての授業展開（受注品製作）

「生徒の振り返り」で特徴的な記述が見られたため、担当者3年産業科鐘ヶ江真知教諭と亀田倫代教諭による授業展開を次に示す。

(1) 指導の目標

- ・与えられた役割を果たすことができる。
- ・置かれた状況の中で組織的な考え方や行動をしながら仕事を進めることができる。
- ・自分の担当の仕事の他にも周りの状況を把握した動きをすることができる。

(2) 評価の観点

- ・指示や仕事内容を確実に理解したか（理解できるように質問したり、メモを取ったりするなど）。
- ・これまで学んだ知識や技術を生かして、製品の作成に取り組むことができたか。
- ・決められた期限内に、与えられた仕事をやり遂げることができたか。
- ・必要に応じて他の係と連絡・調整しながら仕事を進めることができたか。
- ・組織全体を把握しながら、自分の役割を考え、取り組むことができたか。

(3) 指導計画

学習内容及び学習活動	指導上の留意点
第1時「受注品の納品に向けて」	
・室蘭のカフェから受注を受けたこと、その枚数や用途を知る。 ・納品までのスケジュールを立てる。（数学）	・受注してくださったお客様の思いについて考える時間を設ける。
第2～4時「試作品の作成」	
・受注品完成に向けて必要な知識と技術の確認。 ・全員で知識と技術の共有。 ・粘土の厚さや形を統一させるための基準の設定。 ・必要な粘土の量について（数学）	・小テストを行うことで、これまで学んだ内容の定着度を確認する。 ・一定の品質の物を作る必要があることを理解できるように説明する。 ・準備段階から関わっていることを実感できるような題材を設定する。
第5～6時「組織図の活用」	
・全ての仕事量から、担当する枚数、商品チェック係、給食や掃除の連絡・調整係など各係の決定。（数学） ・想定される失敗の洗い出し。 ・各連絡系統で想定される報告・連絡・相談について（国語）	・組織図を使い、全ての仕事を把握することや、仕事の関連性を視覚的に提示する。 ・必ず全員が責任者になるよう係の数を調整する。 ・特定の仲間に負担がかかっていないかという視点を持てるよう、数学では平均の出し方や割合の考え方を指導する。 ・想定外を想定できるよう、起こるかもしれない失敗について考え、手立てを考える時間を設定した。
第7～15時「製品の作成」	
・各担当による製品の作成。	・確実な報告・連絡・相談、必要に応じた係間の調整など、適宜組織図を使いながらアドバイスをする。
第16時「納品と振り返り」	
・完成した製品の納品。 ・計画から納品までの過程の中で良かったところと改善点の見直し。 ・次の受注品に向けた計画。	・納品先の方からの感謝の言葉について伝える。 ・計画から作成までの中で振り返ったことを次の計画に生かせるよう、PDCAサイクルを基にしたワークシートを使用する。

(3) 指導計画

① 指導の実際A

学校の組織としては、模擬株式会社があり、受注品を受け、会社の仕事として作業学習に取り組むことができるようになった。それをより生徒の深い学びにするために、理解した上で作業学習に取り組むことができるよう、各教育活動とのつながりを工夫することとした。

数学では、「50枚お皿を作る場合、合計何グラムの粘土の準備が必要か。」「30枚お皿を受注した場合、どのように仕事を分担すると平等かつ確実な仕事ができるか。」「〇月〇日の締め切りにはどのような時間配分や作業量で仕事をしなければいけないか。」など、数学の時間で問題を解いた後に作業学習に取り組んだことで、数学的な考え方をを用いて理解した上で作業をすることに繋がった。

国語では、「報告・連絡・相談の各場面で、誰にどのような言葉で伝えることが望ましいか。」、作文では、「文章表現や誤字脱字をグループでチェックし合い、整った状態の物を提出する。」などについて組織図を生かすとともに、確実な仕事をするという意識と習慣をつけるための授業の工夫を行った。

協同学習や模擬株式会社の取り組みを通して身に付けた力は、自分の目の前のことに集中してしまいやすい生徒たちに、周りの人と一緒に働くという感覚を実感させることである。組織図を使い、担当の振り分けや責任者を決めているときに普段は自信がなくなかなか自分から責任のある仕事を引き受けることがなかったA君が、「これって、できるの自分しかないよね、やります。」という言葉を使った。今までとは違う発言にどうしてそう思ったのかをA君に聞いてみると、「組織図を見ると、他の人はみんな2つの仕事を持っているけど、自分は一つしか担当していないから自分がやるべきだと思いました。」と発言した。

また、Bさんが全体の調整役に立候補したときには、Cさんが「Bさんはこここの責任者をやっているから、大変だと思う。私がやってみてもいいですか?」という発言があった。協同学習の一環として生徒同士で話し合いを以前から設定することが多かったが、意欲の高い生徒と意欲の低い生徒の役割の負担の差を解消することが教師側の課題の一つにあった。

しかし、組織図を使うようになってからは、やりたいやりたくないという感情だけで役割を選ぶのではなく、「自分がやるべき仕事なんだ。」という自主性が自然に徐々に育ってきたと実感する。担当が決まり、ある程度の見通しを立てた後に実際に成型の作業に入ると、生徒自ら自分たちの進捗状況を黒板に書いて常に確認できるようにしたり、自分の仕事の進捗状況を把握したりするための工夫を行っている。この学習方法を始めた当初は、教師が一人一人の立てた見通しを基にスケジュールの確認をして、全員が分かるように黒板に記入することを指示していた。

今では教師からの指示がなくても、自分たちにとって良い方法を選択できるようになってきた。優先順位をつけることが苦手な生徒にとって「みんなで協力して作業する。」という指示によって、一番優先しなければいけない作業を後回しにしても他の人の手伝いをすることが良いことだと考えて行動してしまうことがあり、なぜそれがだめなのかを理解させることが難しかった。

自分の状況や周りの状況を把握していることで、製品を製作造る途中で生まれる乾燥を待つための浮いた時間で他の担当者に「板伸ばしだけでも手伝いますか?」などという効率の良い時間の使い方ができるようになった。このように自然に協働して働く力が徐々に身に付いてきている。

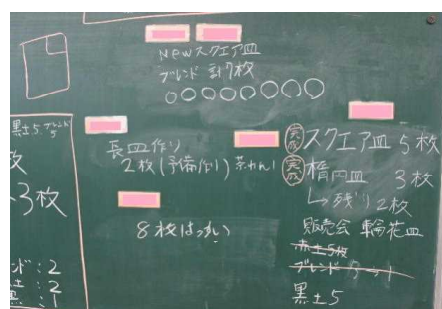


図3 生徒が書いた作業状況

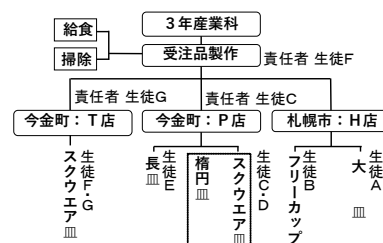


図4 組織図

② 指導の実態B

模擬株式会社のシステムを利用して授業を構成することで、生徒に一番身に付けさせたい力は周りの人と協同して働く力である。このことを念頭に置いて授業を構成している。目の前のことだけ、自分のことだけに集中しやすい生徒の実態から、仲間と共に働くことで得られる充実感や責任を持って仕事をやり遂げるための工夫ができるようになることを目的としている。

町内の飲食店を中心に合計6種類の受注品を請け負った際に、各製品に1人または2人の担当に分け責任者を決めて製作に取り組んだ。ある生徒が担当している皿の素焼き後の数枚にひびが入っていることが分かり、急きょ作り直しが必要になった。

こういった状況になることで、改めて見過ごしていた生徒の実態が見えてきた。組織図を使って仕事内容を提示していることで、組織の一員として働くことを理解しつつある生徒は、他の担当であっても見通しの修正に取り組み、自分の担当に余裕がある場合は手伝えることを探そうとする。

このような考え方の定着に役立ったと感じる学習は、数学と関連して行った平均の出し方の授業である。仕事を平等に割り振るということを基本として、誰か一人にだけ負担がかかっていないかなどという視点と実際に誰がどう動くかという視点を少しずつ身に付けられるようになってきた。

生徒からの提案があるときは相談に乗るという形で教師の意見も伝え、最終的には生徒が選択するという方法をとっている。一方で、この受注品を担当していた生徒は納期に間に合うように作り直すという考えには至らなかった。この生徒の実態として何かに継続して取り組むことが苦手であり、その結果、成功体験が乏しいということあげられる。学校の中だけで取り組む場合、やらなくても済まされるという選択肢が生まれることがある。しかし、受注品として学校外とつながっている場合には、その選択肢が生まれないことも生徒にとって仕事に責任を持つという学びにつながる。

また、日頃からコミュニケーション能力が大事であると言われていたが、作業学習においてコミュニケーションの基礎として報告・連絡・相談の3つをコミュニケーションの指導の中心にしている。予期せぬことが起きたとき誰かに報告することや、相談することがなぜ大事なのかは、組織図を使って仕事を提示することで仕事が自分だけの問題ではなく、周りの仲間の仕事にもつながっていることを説明している。

このような指導を通して、納期までに作り直すことの必要性を説明したが、その生徒は実行に移すことができなかった。このときに、もう一度生徒の実態を振り返る必要があった。以前からこの生徒はノルマが決まっている方が取り組みやすいということを言っていた。また手先は器用で製品を作ることは得意であるが、挨拶や返事という基礎的なマナーが身に付いていない部分がある。人と関わることが苦手という面からも、必要な相談をする能力が身に付いていないということもある。このことから、教師が言っていることはなんとなく分かるが、どう動いていいのか分からないということが考えられた。また、生徒の能力以上のことを求めてしまっているということにも気付いた。ここで教師に相談するように促すのではなく、全体の責任者になっている生徒に相談してみるということを提案した。正しい解決策を出すのではなく、試行錯誤しながら自分たちで答えを探してみるという経験を積ませたいと思っている。その上で、もう一度カレンダーを使い、納期まで残された日にちを確認し、スモールステップで取り組めるよう一日単位でどこまで進めるかを生徒と一緒に確認し、諦めずに仕事を最後までやり遂げる方法を考えた。

生徒の実態を見極め、理解の段階を把握し全体指導と個別指導を有効に使いながら授業を進めることが必要となる。また、実態差のある生徒に対して、見通しを授業の一時間から一日単位、その後一週間単位などの見通しを調整しながら作業に取り組むようにすることで全員が同じ目的に対して自分なりの取り組みができるようにしている。その際に、教師がつくったワークシートから始まり、カレンダー、スケジュール帳など、より将来活用しやすいものを使用するようにしている。